

安徽省繁昌県柯家冲窯跡—五代北宋青白磁窯—

佐々木 達夫

1. はじめに

安徽省では晩唐、五代北宋に青磁、白磁や青白磁が作られ、越窯や景德鎮、あるいは定窯など北方窯との技術的系譜的な関連が注目されている。しかし周辺地域の越窯や景德鎮に比べ知名度が劣り、実態はほとんど知られていない。唐五代宋の安徽省の窯跡は、『新中国考古学五十年』によれば 1950, 60 年代に寿州窯、肅窯、繁昌窯の 3 カ所が知られ、1980, 90 年代に涇県、宣州、蕪湖、繁昌、霍山、績溪、廬江、太湖、金寨等、20 数カ所で窯跡が発見され、いくつかの窯跡の採集品は簡報で発表された (1)。2002 年 11 月 6 日に繁昌県で発掘中の窯跡を訪ね、その折りの見聞を報告したが (2)、そのうちの一つ繁昌県柯家冲瓷窯跡発掘が 2006 年 4 月に図・写真入りで報告された (3)。青白釉磁は北宋景德鎮が中心であるが、同時代の青白磁を生産した窯跡として繁昌窯も重要な窯である。『考古』2006-4 報告は簡報で報告内容のみでは詳細不明な部分がある。2002 年見学时点では撮影禁止であったが、今回は窯跡写真と実測図を利用して筆者観察部分を追加しながら窯跡等を解釈することが本稿の目的である。

2. 窯跡の位置

安徽省蕪湖市繁昌県の郊外南 1.5km ほどにある柯家村の小山斜面上に窯跡群があり、長江支流峨谿河が臨める。現在、全国重点文物保护单位に指定されている。農地の広がる平野から家がまばらに建ち並ぶ小さな谷間の道を徒歩で数分間ほど山間に入ると、右側にややきつい傾斜面 (40 度以上) をもつ尾根 (笠帽山) が張り出しており、その尾根斜面上を地上式のトンネル状の窯跡が谷筋方向に直角方向に登る。廃品は匣鉢が主となり、窯跡と同じ地面の上に、窯跡に沿って捨てられ、今は堆積して窯跡よりも高く積み上がっている。窯跡から少し離れると、元の地形が急な傾斜で下がっている。窯跡の中程の左側に平坦面があり、工房跡が残っている。煉瓦基礎の家跡とその近くで沈殿池 (沉淀池) が発掘されている。さらに少し谷を数分登ると左側に瓷土を掘った跡が見える。

この地域には登窯 (竜窯) 跡、工房跡・水簸場、瓷土採掘場が同じ狭い谷間に沿ってあり、晩唐、五代北宋の白磁・青白磁が継続して生産された。質の良い白磁があるが、景德鎮の青白磁とは区別できる程度の質のものである。この付近には以前に試掘された窯跡と 2002 年訪問時に発掘していた窯跡 (いくつかの呼び方がある。たとえば繁昌窯、繁昌瓷窯、柯家村窯、柯家村梅冲山窯、柯家冲瓷窯、柯家冲窯) の他にも数基の窯跡が残存しており、最近はいくつかの窯跡群が繁昌窯跡または繁昌柯家村窯と呼ばれている。



1-1 繁昌窯跡付近の長江支流峨谿河
図 1 a 繁昌窯跡付近の風景等



1-2 繁昌窯跡付近のレンガ窯



1-3 繁昌窯跡近くの農村



1-4 繁昌窯跡は中央山裾にある
図1b 繁昌窯付近の風景等



1-5 柯家村遺址の碑 1981 年建設



1-6 繁昌窯遺址の碑 2001 年建設

3. 発掘調査の経緯

繁昌柯家村窯跡は 1955 年に発見され、1958 年と 1979 年に試掘調査され、安徽省人民政府が 1981 年に全省重点文物保护单位・柯家村遺址として認定した。『東南文化』1991-2 に報告され、白磁の碗や執壺が主な製品で、匣鉢を使用することが知られる。2001 年 6 月に中華人民共和国国務院が全国重点文物保护单位・繁昌遺址として指定し、重要な青白磁の窯跡として認識されている。2002 年 9～11 月に五代北宋時代の繁昌柯家村窯跡は、安徽省文物考古研究所、繁昌県文物管理所、中国科学技術大学の共同発掘で 516 m² が発掘された。

2002 年の発掘では尾根上で竜窯跡、30 m ほど離れた尾根裾部で工房跡が現れ、出土品から年代が晩唐～北宋と推定できるようになり、南宋までと言われていた年代が修正された。発掘者の説明によると、10 月は蒸し暑く大きな蚊に悩まされたという。発掘地点を決めた後にトレンチ 3 カ所を設定し、層位を確認し、10 月 10 日から 2 カ所を深く掘り始めた。竜窯跡の残り状態はよく、保存できると発掘者は判断した。その 2 週間後、窯跡の全体形が判明した。さらに窯跡の上方と下方の 2 カ所を掘った。窯跡の両側は高くなり物原で、そこから多くの陶片が出土した。こうして焼成方法、技術、焼成温度などが推定できるようになった。工房跡のトレンチも掘り広げると、穴が発見されたという。

筆者が見学した時点で不明な点は窯跡上方部分、燃焼室、工房跡などであった。山側にあると推定できる瓷土作り用の水路を発見する調査も必要であり、瓷土を近くから採取したかどうか検討を要する。北宋の青白瓷と南宋の青瓷との関係、景德鎮との技術的な関係、あるいは国外に輸出した可能性も今後の研究課題であった。こうした点について 2006 年報告で判明した部分は旧稿に付け加えた。

4. 窯跡の構造

発掘された窯跡は竜窯 1 基で、尾根を登るように壁はレンガで築かれ、窯体内部を中心に発掘された。水平長 52 m、斜長 56 m、幅 2.3～2.5 m、傾斜は下方が緩く上方がきつくなり 10～24 度で高低差 19 m、下方ほど後の土砂の堆積が厚く、発掘された窯体は周辺から見下ろす位置になる。窯体は下から見上げると、ほぼ真っ直ぐに登るが窯尻に近い部分で左側に曲がる。窯は燃焼室前の作業場、燃焼室、窯室、窯尾、窯門などに分けられる。

燃焼室前の作業場（操作間）は焚き口前の左右に窯壁崩れレンガを積み、焚き口側から 1.5 m ほどが長期の使用で平らとなる。燃焼室は半円形で小さく、焚き口が 1 つで燃焼室床は 10 度の緩い傾斜でレンガを敷き、50cm ほどの低い段となる奥壁を境にして焼成室に続く。レンガを垂直に積んで壁とし、表面に泥を塗る。面積は小さく、長さ 0.45 m、幅 1.4 m である。燃焼室の中央に焚き口があり、幅 45～65cm、残高 1 m で、口を閉じた痕跡を示す 3 層のレンガが 20cm の高さで残る。

焼成室は傾斜した床で、床面に製品を入れた匣鉢を並べて積み上げる。14 個の匣鉢が積み上がったまま残る場所も見られ、匣鉢内には未焼成碗があった。焼成室の長さは 53 m、残存する壁の高さは 1.4 m、幅は中央部のもっとも広い部分で 2.8 m、燃焼室に近いところはもっとも幅が狭く 1.4 m である。床面傾斜は下方がきつく、中程が緩く、上方がきつく、最後が緩くなり、少し窄まる。床には細砂が敷かれ焼結している。床面には匣鉢が 3～5cm の間隔で横方向に並ぶ。壁は 1 枚の煉瓦積みで、煉瓦は小口を合わせて長くして窯体壁を作るため、壁厚さは煉瓦の幅分だけの薄いものである。焼けて自然釉が付いた面が残る古い壁に新しい壁が接する部分があり、修復されていることがわかる。壁は床から数十センチの高さで残る部分が多く、残りのいい部分と残りの悪い部分がある。残りのいい部分はよく焼けた面が多く、窯体の途中から薪を投げ込む焚き口（窯門）があった場所を推定できるが、焚き口の孔は少し上方にあったようで、残存部分が見えない。窯尾は残りが悪いが、幅 1.8～2 m ほどでやや窄まり、床傾斜は 18 度である。

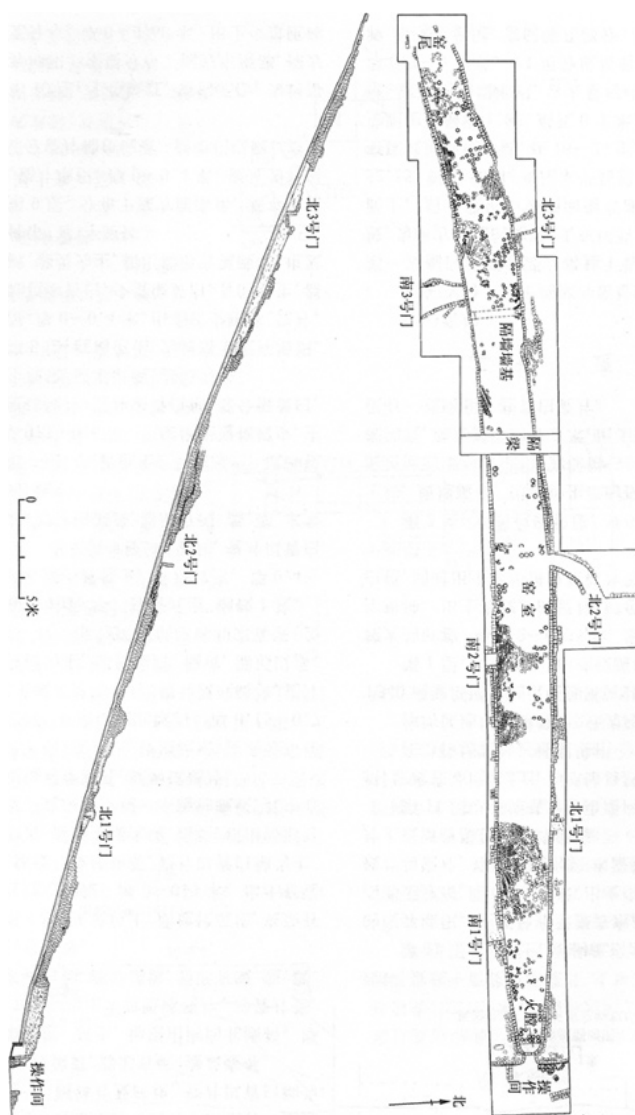


図2 繁昌窯の竜窯跡, 下方(東)から上方(西)をみる(『考古』2006-4より)

窯体・焼成室から枝のように分かれた幅の狭い通路状の煉瓦積み部分がある。製品を詰めたり取り出したりする出入り口で、平面形は枝のように緩いカーブを描いて下方から入りやすくなる。左右の両側にそれぞれ3カ所ずつ（北1, 2, 3、南1, 2, 3）、計6カ所の出入り口・窯門がある。4つの窯門は幅60～65cmで、北2は内側60cm、外側75cm、南3は内側70cm、外側1.5mである。北1と南1の2つの窯門には詰めた紅焼土が残っていた。

1998-99年に発掘された浙江省慈溪市寺竜口窯跡は南宋代初の竜窯跡であるが（『寺竜口窯址』2002）、長さ50m、幅2mで全体形や燃烧室の構造や形など繁昌窯跡とよく類似している。寺竜口窯跡の窯体はほぼ直線的で傾斜度は10-12度ほどと緩く、ほぼ5mおきに11ある窯門はすべて左側にあり、物原が窯門側にあることなどについては、今回検討している窯跡と異なる点である。



図3 竜窯跡焼き口外の作業場(T125)、半円形燃焼室、竜窯跡南3号窯門（出入り口）、焼成室内の匣鉢堆積状況（『考古』2006-4より）

5. 物原

物原は窯跡の両側にあるというが、窯跡を見上げた右側がトレンチ発掘で拡張されている。窯体に沿って右側に傾斜して下がる高さ数mの堆積が層位的にいくつも見える。出入り口から捨てたと思われるが、物原の発掘は一部であるため、まだ確かめることはできない。発掘した部分では匣鉢の破片が何層にもなって傾斜して捨てられている。製品の廃品は少ないようであり、失敗品がきわめて少ないことが想像できる。廃品堆積の下は地山の粘土が、窯跡に対して直角方向にほぼ平坦に広がり、窯跡本体が築かれた傾斜面の右側平坦面が数m続き、その上に廃品が堆積して盛り上がったようである。窯跡から少し離れると自然地形が急な傾斜で下がり、周辺を歩いたときの様子では物原も消えるようである。

製品は底部無釉の白磁・青白磁碗が主となり、匣鉢内で焼成される。匣鉢は円筒部とその下の緩いカーブ底からなる。形状は宋代に一般的なもので、重ねると背の高い円筒となる。これは、すでに1点が報

告済みの形状すなわち側壁が下開き状となるものではない。発掘者の説明では匣鉢外側面に釉が掛けられたというが、降灰が熔けた自然釉の可能性があったと思われる。匣鉢の使用回数も1回限りという説明があったが、自然釉が全体に掛かるとすれば、何回も使用したことになる。ただし、慈溪市寺竜口窯跡の五代の層位から出土した匣鉢は、精製品を焼く場合は製品の中に詰めると重ね合わせた部分に釉を塗って密閉していた（『寺竜口窯址』2002）。寺竜口では唐代と北宋代にこの技術は見られないので、五代頃の特例である。繁昌窯跡でも同様の技術が用いられたのであろうか。

6. 工房と作業場

窯跡の中程から左側にやや下り、25 mほど離れた台地状平坦面に工房跡1基と作業場がある。層位は灰褐色土の耕作土の下に灰黄色砂質土があり、それは平坦で硬い。工房跡のレンガ基礎が長方形8 m×6.5 mにめぐる。きれいな面を内側にしたレンガは窯壁の残片を使用し、残存高さは20～25 cmほどである。工房跡の入り口は南向きにあり幅1.65 mである。入り口外に甕底部1片が残るが敷いたものであり、路面は平らで硬い。工房跡の周囲に幅1.65 mで煉瓦が並ぶ部分が数カ所あり、その間が通路部分のようである。工房跡の東側外に径40 cmの穴があり、轆轤の基礎の可能性もある。工房跡内には粘土と砂が柔らかく堆積し、レンガ片、磁器片、焼台、匣鉢片が多く発見された。磁器片は碗と蓋が主で執壺、水盂もあり、青白釉が主で黄白釉もあり、白釉はきわめて少ない。匣鉢は漏斗状が多く筒状は少ない。

それに隣接して瓷土を作る沈殿池が2つ並ぶ。粘土を流し沈殿させ陶土を作る施設である。発掘中の見学では浅い凹みが見え、北側に小さな方形の深い煉瓦積み穴C2があった。南側の大きな長方形穴C1は平面が2.4×1.9 m、壁が窯レンガで水平に築かれ、基礎部レンガが3層25 cm残る。内部にはきれいな黄白色砂粒が堆積している。C1の一部に重なるようにきれいな紅褐色粘土が長方形に残り、釉材料かと推定される。長方形穴に接して西南部に、両側にレンガを積んだ幅40 cmのC1の排水溝がある。

隅円方形煉瓦積み穴C2の外側はC1壁に接するレンガ壁で囲まれ、その中央にレンガ壁の隅円方形穴がある。外側壁は3層の高さ23 cmのレンガが平面2.5×2 mで残り、壁内には匣鉢片も混じる。東壁部分に大きな石が置かれ、そこから幅50 cmの外に開いた排水口があり、外に径1 m、深さ40 cmの円形穴がある。西北壁には幅12 cm、高さ15 cmの暗渠がある。いずれの部分にもきれいな黄白色砂が堆積している。内部の隅円方形穴は平面形1.25×1.4 mで、周壁にレンガを11層積み深さ1.35 mである。内部にはきれいな淡黄色粘土が堆積している。

発掘中の観察では、上方部分に粘土水を外に流す小さな孔があった。煉瓦積みの深い穴の両側に2つの穴があり、上方は浅い楕円形、下方は深い隅円方形の穴である。谷間ではなく、台地上に水簸施設があるため、水を引く施設等が台地上部にあるはずであるが未調査である。

7. 陶石採掘場

工房跡からやや下り、浅い谷を越えた向かい側の山裾が瓷土を採掘した場所である。翻車嶺と呼ばれるこの場所は、今は挟られて平坦となる部分があり、その崖面には白い瓷土が露出している。繁昌窯跡の陶土採掘場であり、繁昌柯家村窯跡にもっとも近い採掘場である。

8. 窯詰道具と製品

焼成時には窯詰道具に匣鉢が用いられる。漏斗状匣鉢が主で筒状匣鉢は少ない。M字状匣鉢はない。匣鉢蓋、円盤状ハマもある。ハマは厚く素材も形も粗雑である。焼成時に重ねた匣鉢の隙間を釉で塗り、焼成中は溶けた釉内を空気が抜けるが、焼成後は釉が固まり還元をきいた焼成となるという説明を発掘

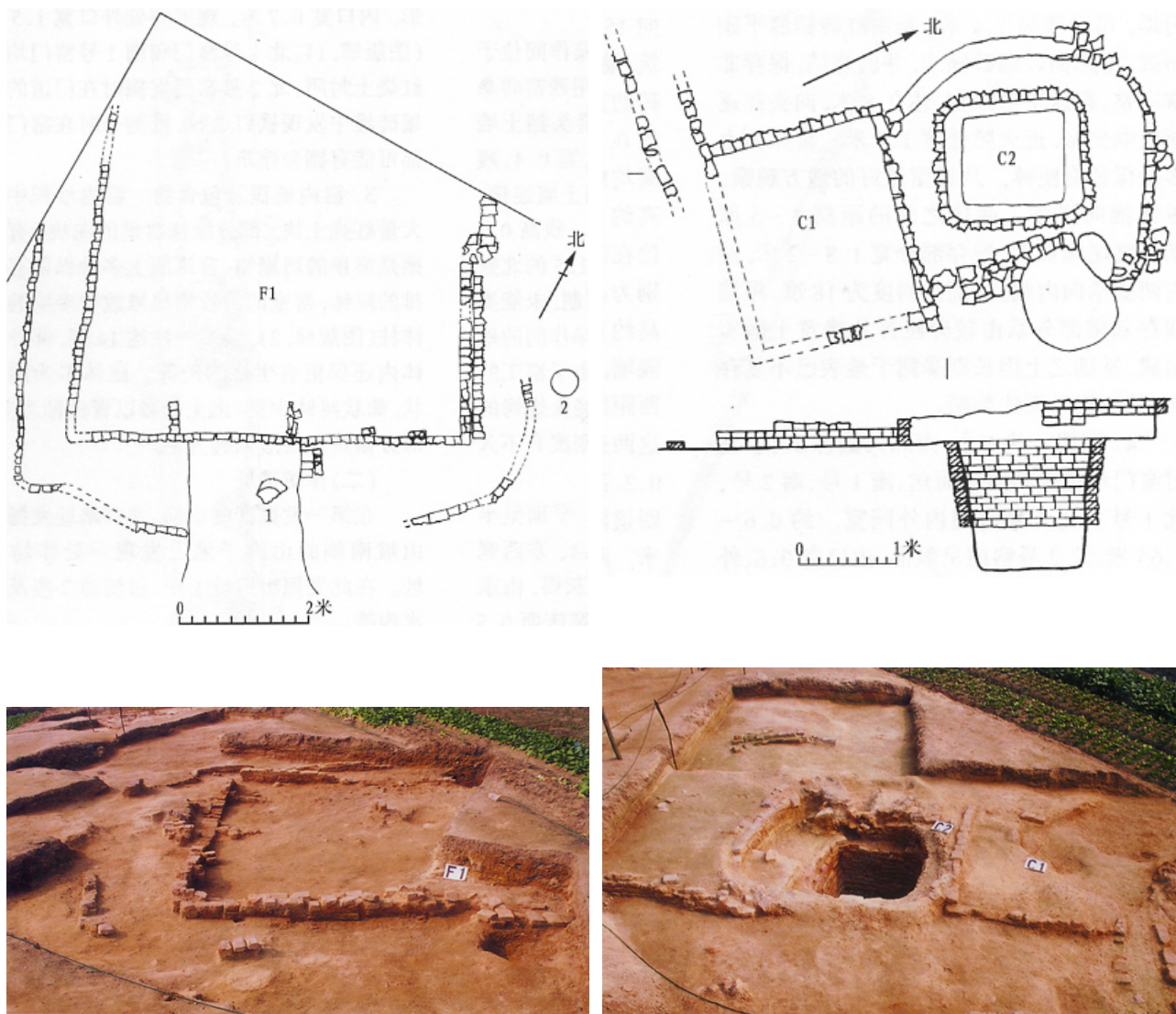


図4 工房跡、陶土沈殿池 (『考古』2006-4 より)



図5 繁昌窯跡近くの陶石採掘場

現場で聞いたが、2006 年報告にはそうした説明がみられない。官窯と肩を並べる技術水準であったと言うこともできる。

製品は青白釉磁器が主で、還元に失敗して、あるいは初めから意図したものか、黄色や灰色になった青白釉もある。器種は碗や盞が主で、碟、執壺、水盂、蓋、炉、粉盒、盤、罐がある。下層では青白釉または白釉が多く、上層では釉に青みが増すものが多くなる。碗や執壺（把手付き水注）には棒状具を押し当てた線文が見られるが、内面に花文が印される例外的なものを除けば、他に文様はない。外面底部は無釉である。

9. 年代など

柯家冲窯体中程の西側 T95 区の堆積は 11 層に分かれ、いずれの層からも瓷片や道具が出土する。第 9 ～ 11 層出土の青白釉盞は五代の江蘇省南京南唐二陵出土品 (4) と似ている。第 6 ～ 8 層の折肩鉢は北宋咸平 5 年 (1002) の江西省九江市出土品 (5) と類似し、碗や盞等は北宋早期に一般的な器形であり、北宋早期と判断できる。第 5 層から「方」文字のある匣鉢、北宋祥符元宝 (1008-1016) が各 1 点出土した。第 1 ～ 2 層出土の青白釉は青みがかかるものが多い。第 4 層から未施釉の碗底部片が出土し、底部中央に円形孔が穿たれており、試焼片（色見片）である。第 8 層から「方」文字のある匣鉢 1 点が出土した。なお、T96 区第 2 層から北宋嘉祐元宝 (1056-1063) 1 枚が出土した。こうしたことから、柯家冲窯跡は五代に始まり北宋の中期に衰退し晩期に終焉した窯跡と推定される。主要な稼働時期は 10 世紀中頃～ 11 世紀末であろう。繁昌は宣州に属し五代は南唐国領であり、官窯であった宣州窯は繁昌窯跡であったと推定される。ただし、繁昌窯跡の主要稼働年代は南唐が滅びた後の北宋時代である。

10. 安徽省の窯業

安徽省は地理的に中国の中央部にあり、長江が利用でき、瓷土に恵まれ、唐五代宋代に 20 カ所ほどの地域で窯跡が発見された。窯跡の規模は大きいらしいが、未調査部分が多い。繁昌窯跡の製品はもっとも質が良いと言われる。青白釉瓷器は景德鎮湖田の北宋時代製品が著名であるが、それ以前の五代青白釉瓷器は安徽省繁昌窯跡と湖北省湖泗窯跡のみと窯跡発掘者は考えている。範粹墓出土品が白磁と呼んで良ければ白磁は北斉頃（6 世紀後半）に生まれ、唐代は北中国を中心に多くの白磁窯が稼働し (5)、白磁の 1 種類である青白磁が宋代に隆盛した。景德鎮でも五代に青白磁が生まれたと劉新園は考え、景德鎮と繁昌窯の比較が青白釉磁誕生頃の様相を探るのに必要である。ただし、初期の青白磁は釉調が黄ばみ宋代隆盛期の青白磁とは違い、白磁と明確に分けるのは難しい。安徽省では北宋代に廃絶された窯が多く、この地域に政治的混乱が及んだことが原因と推定されているが、景德鎮青白磁の大量生産の発展などの影響もあるのだろう。

2002 年 11 月 7 日に訪ねた繁昌県博物館・繁昌県文物管理所は 2 階に安徽省内窯跡出土破片、3 階に省内遺跡出土陶磁器を展示。2 階に簡単な各窯跡展示解説があったが、3 階は出土遺跡名程度の解説であった。安徽省内窯跡の 9 カ所の破片を少数展示していた。展示解説と観察記録を次に記す。

繁昌窯跡は蕪湖市繁昌県城郊、柯家冲窯跡、駱冲窯跡の 2 カ所にあり、五代～北宋が主で、晩唐と南宋も含むか。青白瓷が主で、白瓷も少量ある。主要器形は碗、盞、執壺、盂、粉盒など。古文献に宣州窯と記載され、五代は南唐王朝の宮廷用品を作り、一時期官窯であった。柯家冲窯跡出土品は白瓷が主で青瓷もある。白瓷は灰白色素地。目跡はなく、直接の重ね焼き。碗、罐、執壺、合子の破片を展示。碗口縁は直線状に伸びるものと唇口がある。五弁輪花碗は器壁を外側から棒状具で押し内側を凸線とす

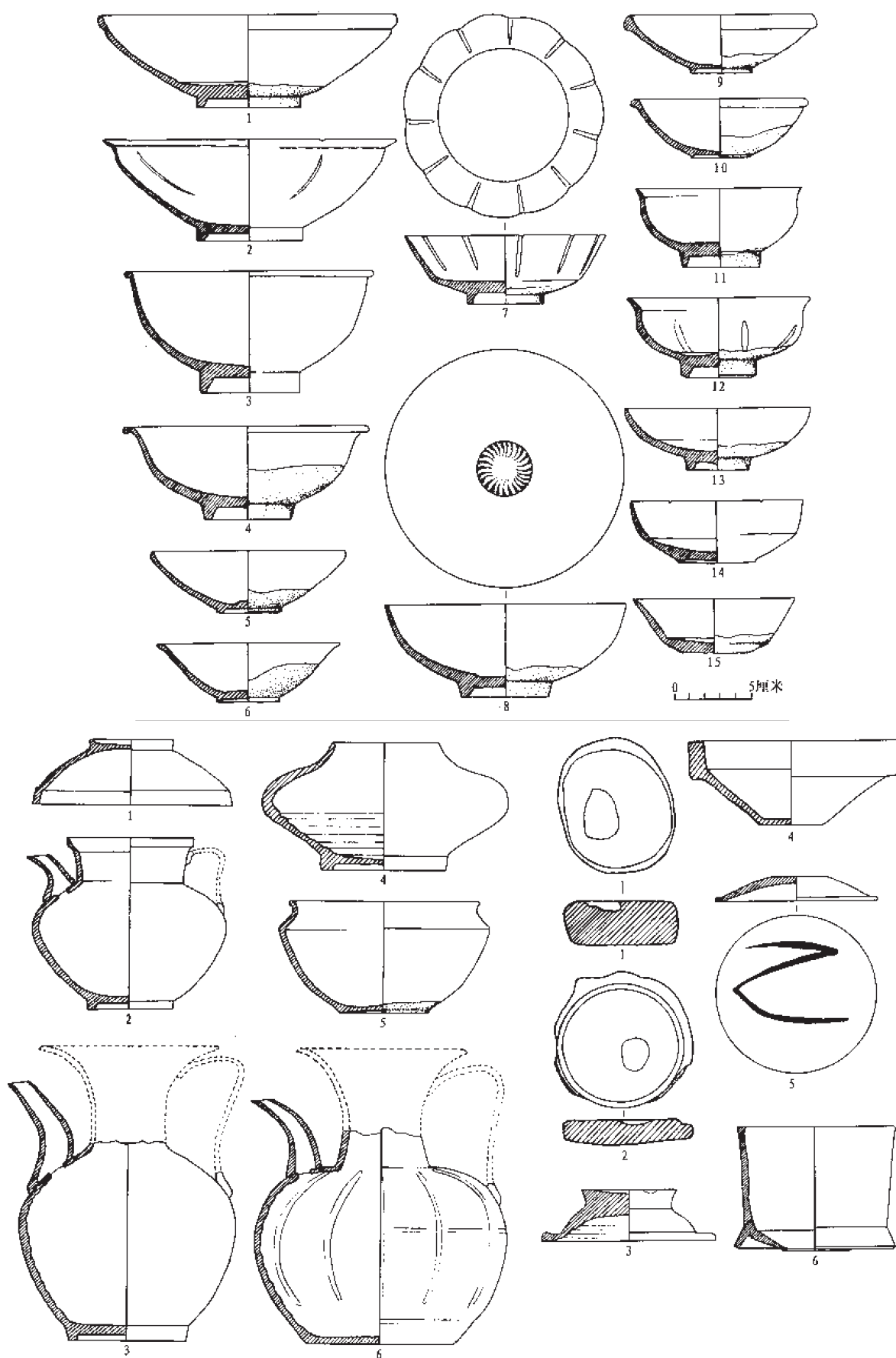


図6 窯跡出土の青白磁と窯詰道具（下段図は縮尺不同）（『考古』2006-4 より）

る。彫り文様の碗もある。駱冲窯跡出土品は白瓷で、灰白色素地。匣鉢を使用、目跡がない碗とあるがある。目土は素地と同じ瓷土を使用。目土を使わず直接重ね焼きの碗もある。碗の特徴は、輪花もあり、口縁が薄く直線的に伸びる、やや内湾状、やや内湾状で小唇口などがある。釉は高台際まで掛けられ、底部は無釉。碗高台は輪高台と hollow base がある。碗外側面に幅広蓮弁文が彫られたものもある。碗内面に刻花文もあるが無文が多い。中央の小円周りに花卉を描き、周囲を円で囲い、簡単な蔓草状文を刻んだ碗もあった。

寿州窯跡は淮南市窯河鎮の窯河兩岸にあり、随～唐代。竜窯と饅頭窯の2種類がある。唐代初は青瓷が主、中期以後は黄釉瓷、黒釉瓷、褐釉瓷も作られる。盤口壺が主要な器種で、碗、罐、壺、枕などがある。唐人陸羽が茶経で六大名窯の一つに挙げる。展示品の黄褐釉碗は目跡が3個、黄灰色素地。棒状トチンもある。肅窯跡（白土窯跡）は宿州市肅県白土鎮にあり、唐～金代。唐代は黄釉瓷が主で寿州窯に似る。宋～金代は磁州窯の影響を受け、民窯。展示白瓷は白化粧土上に透明釉を掛け、素地は黄色、灰色、黒色で粗い。目跡があり、器壁は厚く、灰色素地の陶器が主。東門渡窯跡は蕪湖県花橋鎮東門渡村にあり、晩唐、五代北宋。青釉と褐釉が主で、碗、鉢、罐などがある。粗瓷酒罐に「宣州官窯」の印記があり、地方官窯。展示碗は黒褐釉で黒色素地、目跡がある。琴溪窯跡は宣州市・県琴溪郷施窯村にあり、晩唐、五代北宋。青瓷で執壺、碗、盤など。民窯。展示青磁は灰色素地で目跡数が多い。霞間窯跡は宣州市績溪県高・郷霞間村にあり、晩唐、五代北宋。青瓷、黒瓷、褐釉瓷。越窯を模倣した青瓷。民窯。越窯に似た青瓷は灰色素地で目跡が多い。竦口窯跡は黄山市歙県桂林郷竦口村にあり、晩唐、五代北宋。晩唐は青黄釉粗瓷を作る。五代北宋はやや精緻で、越窯を模倣した青瓷。民窯。越窯に似る青瓷碗は灰色素地で目跡がある。岩前窯跡は黄山市休寧県岩前鎮にあり、晩唐五代で、民窯。青黄釉粗瓷。下符橋窯跡は六安市霍山県下符橋鎮西側にあり、北宋～南宋、黒釉瓷。

繁昌県博物館・繁昌県文物管理所3階展示の陶磁器は繁昌県内遺跡出土品。建設工事に伴って出土したようで、墓出土品が主。新石器時代土器片数点から清代まで。青白瓷が多い。新港街道窖藏出土品は未報告で、元末頃の一括品。染付蓋付罐（壺）2点、染付高足杯3点、竜泉窯青磁罐（壺）1点、瑠璃釉香炉1点、瑠璃釉瓶2点を展示。壺は下方に蓮弁文が巡り、胴部全体が3段に分けられ、1点は竜、他の1点は花鳥が主文である。高足杯は壺の中に入って出土。高足杯はいずれも杯部外側に竜文が描かれ、1点は足下部に蔓草文が巡り、他の2点は無文。

績溪県から歙県に向かう道路際に績溪県孔霊窯跡を訪ねる。績溪県では8カ所で窯跡が発見されている。道路は山際の緩やかな傾斜地の桑畑を通り、一段高くなった畑の山側崖内にトチンや陶片が見られる。傾斜地を桑畑として段にしている。数十m離れた2カ所の段崖で破片を観察。いずれも五代北宋の窯跡。青瓷が主、褐釉瓶も少し見られた。青瓷は碗が大部分で執壺もある。碗の器壁は薄いものと厚いものがあり、口縁部はそのまま伸びるものと、僅かに膨んで外反状になるものがある。口縁部のみ外側から押した輪花がある。碗の多くは底部を除いて白化粧土上に透明釉を掛ける。碗底部は無釉で濃褐色、素地は黒色または紫黒色。少数だが高台内も施釉した碗があり、それは高台下端部のみ無釉。碗輪高台下端と内面に目跡が残る。目跡数は現地で数えたもので6, 6, 6, 7, 8, 9, 10, 12, 13, 14, 14個があった。倣越窯製品が主となる窯跡。匣鉢は使用せず、大形のトチンがあり、上部がやや開いて中空となる形。トチン外側面に刻文と突き刺し文がある。刻文は十やユで、陶工の名か。突き刺し文は指跡で、数点が並ぶ。写真等は文献(2)に掲載している。

参考文献

- (1) 楊立新, 張宏明 (安徽省文物局), 1999「五十年来的安徽省文物考古工作」『新中国考古五十年』

192-194, 202, 文物出版社。

『文物参考資料』1958-6。

胡悦謙「談寿瓷窯跡調查記略」『文物』1961-12:60-66。

宋伯胤「肖窯調查記略」『考古』1962-3:134-138. 写真。

胡悦謙「安徽肖県白土窯」『考古』1963-12:662-667. 写真。

胡悦謙「談寿州瓷窯」『考古』1988-8:735-750, 写真。

安徽省文物考古研究所（高一竜，賈慶元）「安徽歙県敬口窯調査」『考古』1988-12:1142-1143。

王業友「調査肖窯取得の新収獲」『東南文化』1990-4:213-216。

謝小成「蕪湖県東門渡唐宋陶瓷窯址的調査－兼談宣州官窯」『東南文化』1991-2:213-218, 112。

安徽省繁昌県文物管理所（陳衍麟）「安徽繁昌柯家窯址調査報告」『東南文化』1991-2:219-226. 写真。

叶文程，張浦生「前言」『東南文化』1994-1 増刊号, 1-2。

胡悦謙「安徽江南地区的繁昌窯」『東南文化』1994-1 増刊号, 70-75。

劉毅「宣州官窯及相關問題研究」『考古』1999-11:1038-1045。

『中国古陶瓷研究』4:205-209. 写真。

『中国古陶瓷研究』5:19-22。

(2) 佐々木達夫，2002「安徽省の窯跡・繁昌窯跡等」『金沢大学考古学紀要』26, 159-161.

(3) 中国科学技術大学科技史与科技考古系，安徽省文物考古研究所，繁昌県文物管理所「安徽繁昌県柯家冲瓷窯遺跡発掘簡報」『考古』2006-4, 37-48, 図版4頁. 以下、報告という場合は(3)をさす。

(4) 南京博物院，1957『南唐二陵発掘報告』文物出版社.

(5) 蓑豊，2002「白磁の成立と展開」『東洋陶磁史』東洋陶磁学会，43-49.

佐々木達夫，佐々木花江，2002「アッバース朝白濁釉陶器に与えた中国白磁碗の影響」『金沢大学考古学紀要』26:64-75.